2009 年 3 月 20 日　最終講義

『心理臨床と科学性』

伊藤良子

Ⅰ．はじめに

かつて、心理臨床の事例研究法については、科学的な学問としての要件である客観性に欠けるとの批判があった。それゆえ、心理臨床学の先達は、事例研究の普遍性を示すことに非常な苦労をされてきた。このような事例研究の地道な積み重ねによって、心理臨床は今日の深化を得ることができたと言っても過言ではないだろう。

そこには、人間の意図や操作を超えた事象が現れ出てきたのであって、それこそがわれわれに豊かな「知」をもたらした。これらの事象との出会い、この「臨床の知」に対する真摯な態度こそ、われわれが培ってきたものである。

本講義では、さらに歩を進めて、事例研究によって明らかになった心理臨床のこの「出会い」においては、「科学性」についての新たな観点ともなる「知」が現れ出ていたことをお示ししたい。

Ⅱ．事例研究の科学性

事例研究とは、クライエントについての研究ではない。クライエントとセラピストの間に生じる事象についての研究である。人間を客観的に捉えるとされる実験や調査研究とは異なり、このような「出会い」によってもたらされる「知」は、人間のあり方の真髄に迫るものともなる。事実、心理療法で生じていたことが、そのずっと後に、実験等を通して「発見」されている。

（1）自閉症児のあり方について：孤立無縁の状態にある彼らにおいて＜見ること＞が生きる重要な手立てになっていたこと、この＜見ること＞の共有が他者との出会いを生み出し、この他者が「鏡像」となってこの世における自己の存在(身体像)の発見にいったこと、それは、混沌とした世界にあって、＜私＞の生成を求める人間としての本質的あり方であったこと等が明らかになった。

＊1981 年日本心理学会発表：早期幼児期の対象関係の障害により言語発達遅滞を呈していた女児の事例－Lacan、J. 及び、Klein、M. による理解（心理臨床ケース研究 3「子どもの心的世界における「父」と「母」―ことばをもたらすもの―」1985)

＊1982 年日本心理学会発表：自閉症児の見ることの意味－身体イメージ獲得による象徴形成に向けて―（1）理論的考察、1983 年同（2）＜見る遊び＞の現れ方（心理臨床学研究第 1 号第 2 巻、原著論文、1984)

この当時、自閉症については、言語障害や認知障害などの原因論が強調され、視線を合わさないという彼らの状態像は、脳幹網様体の障害（リムランド）や相手の動きに関心が薄いから（平井）等とされた。しかしながら、現在は、彼らの「視覚優位」のあり方についての認識が生まれ、視覚を用いた訓練法や生活指導が広く推奨されるようになった。また、発達心理学では「共同注視」の重要性が強調されるようになり、脳科学では、「ミラーニューロン」が見出されている。

このような彼らのあり方における＜見ること＞の重要性に気付かれるに至るまでに、先の報告から10年以上の遅れが生じたが、さらに重要なのは、心理療法における出会いの場が真に整えられることによって、これらのことが子どもから自発的に生まれてきて、彼らの困難を共有する道が開かれたという点である。

（2）人間存在の根底にある「不安」と、それを共有する他者の存在の重要性について

＊1983年日本心理臨床学会発表：重症の強迫神経症の治療過程－怒りの嵐の中から生まれた「心の壁」―（『臨床的知の探究(下)』「死の欲動論の彼岸」1988)

薬物療法ではなかなか軽減しなかった重症の症状が、セラピストという他者との出会いによって早期に消失するとともに、そこに、「死の夢」が現れた。それを基盤にして、彼らの根底にあった強い不安を彼ら自らが抱えていく長い歩みが始まった。

（3）箱庭表現の「深さ」について：箱庭表現の内容のみでなく、構造の視点からその独自のあり方を見てとることの重要性

＊1987年国際箱庭療法学会：The Depth of Sand Play Expression and the Verbalization.（箱庭療法学研究第1巻、原著論文、1988）

物語性がなく表層的にみえる無機的な表現に人間のあり方の深い次元が現れている。このような人間存在の基盤ともいえる感覚の世界を共有する過程を経て、豊かな言葉や感情が生まれてきた。

Ⅲ．出会いという現象について：アリストテレスの『自然学』より

アリストテレス：付帯性・偶然性による物事の生成
　アウトマトン（自己偶発）：自然界における偶然の出現
　テュケー（偶運）：行為の帰せられるべき者においてのみ認められる偶然の出会い
フロイトは、素質とテュケー：人間の運命を決定する・・・心的外傷
ラカンは、テュケー：「現実的なもの」との出会い損ないである限りにおいての出会いであるがゆえに反復される・・・転移
心理臨床とは、転移において生じるこの出会いに留まること

以上の観点を基に博士論文

＊1993年「発話者としての<私>の生成の場—心理療法における転移—」

(『心理治療と転移－発話者としての<私>の生成の場』誠信書房 2001)

人間存在における「象徴化」の重要性

Ⅳ. 神経症や精神病圏など多くの事例の心理療法過程において、心理化・身体化・行動化を呈していた状態から、言葉を中心とする「象徴化」が生じてきた。

(「精神分析的アプローチ」『臨床心理面接技法Ⅰ』誠信書房 2004、他)

それは、水が、雨として降り注ぎ、雪や氷となって大地を覆い、また、大気の水蒸気になるように、人間にも、さまざまなあり方が現れてくることを示していた。

(「感情と心理臨床」『感情科学』京大出版会 2007、他)

Ⅴ. 21世紀初頭に至るゲノム研究の画期的な進歩により、明らかにされた科学性について

遺伝子の次元には、心理臨床と重なる広い領野があった。

(『遺伝相談と心理臨床』金剛出版 2005、他)

遺伝子の塩基配列は他の動物とそれほど変わらない。

遺伝子は固定的なものではない。文字記号として作用

豊かな感受性と調整機能の複雑さをもつ：環境とくに人的環境との出会いの重要性

遺伝子の変異はかならず起こる

間違いはともかく起こる（Murphyの法則)、人間はみな変異遺伝子をもつ

変異の発現：アウトマトンとテュケーの出会いによる

そこに生体の多様なあり方と進化が生まれる

人類が今日に至るまで生き残った過程において重要な役割を果たしたのが、「不安」や「こだわり」の強いあり方であった。その能力が人類を守ってきた。

人間のあり方の多様性に開かれた態度こそが、遺伝子に内在している「知」である。
心理療法に生じる変容可能性は、遺伝子という生物学的要因に埋め込まれていたのだ。

Ⅵ. おわりに

人間観の混乱した現代社会において、心理臨床に生じる事象に留まり、そこから学ぶことの意義は、はかり知れないほど大きい。